

ロマン派文学のすがた

仙台イギリス・ロマン派研究会編

ロマン派文学のすがた

仙台イギリス・ロマン派研究会編

ロマン派文学のすがた

一九九三年九月一日発行

頒布価格 三〇〇〇円(本体 二九一三円)

編集・発行 仙台イギリス・ロマン派研究会

代表者 大友義勝

〒九八〇 仙台市青葉区川内

東北大学言語文化部 石幡研究室内

電話 〇三―三三―一八〇〇(内)五六二

東北大生協出版事業部プリントコープ

印刷所 東北大学 発行元 東北大 学生協

〒九八〇 仙台市青葉区片平二―一―一

電話 〇二―二六二―八〇二二

ISBN 4-9900251-1-3

© 1993 Printed in Japan

目

次

ワーズワスの「茨」について——語り手の技法を中心に……………佐藤 義明……………（一）

『序曲』におけるFantasy（ファンタジー）への傾斜

——Discharged Soldierのエピソードを中心に……………鈴木瑠璃子……………（一七）

『隠遁者』第二部としての『逍遙』の意味……………福地 明子……………（四三）

ワーズワスにおける水と時間の流れ——後期の詩を中心にして……………近藤 哲……………（六七）

退屈な詩人ワーズワス

——ホプキンズのワーズワス批判を問う……………森 茂利……………（九一）

コウルリッジにおける「唯一の生命」と想像力……………大友 義勝……………（一一三）

S・T・コウルリッジの『巫女のお告げ詩』

——その黙示的意味と背景について……………和泉 敬子……………（一三三）

P・B・シェリーの詩の中にイラズマス・ダーウィンを追う……………石川 重俊……………（一五七）

「ナイティンゲールに寄せるオード」の歌い手	平井 山美	(一九三)
キーツの芸術観——ロンギヌスとシェイクスピアを軸として——	車田 智子	(二一七)
ニュー・クリティックスとキーツ	吉田 信	(二五三)
キーツ批評に見る新歴史主義	石幡 直樹	(二七七)
始源の白い輝きを避けて		
——シェリー、ステイーブンス、ハート・クレイン		
の詩における「崇高」表現	松井みどり	(三一三)
“Two Starry Eyes” That Led Him to Death:		
<i>Sexuality and the Death Wish in Shelley's Alastor</i>	森 正樹	(三五四)
あとがき	大友 義勝	(三五五)

ワーズワスの「茨」について

——語り手の技法を中心に

佐藤義明

(一)

ワーズワスの『抒情民謡集』初版（一七九八年）に収められた物語詩「茨」は、これまでさまざまな解釈がなされてきた。例えば、S・M・パリッシはこの詩を劇的独白とみる。

……語り手は中心人物であるだけでなく、ある意味では詩の主題でもある。作者が考えているように、「茨」は捨てられた母親と彼女の殺された幼児についての詩ではないし、ほとんどの批評家はそう考えているようだが、また、子を哀れむ母親の激しい感情についての詩でもない。第一に、木についての詩、第二に、人間についての詩と言った方が正確かも知れない。この詩はもとと、心理学的な研究を意図したもので、精神の働き方についての詩である。その精神の働きは、語り手の中にみと

れるし、この詩は事実上、劇的独白である。⁽¹⁾

また、A・S・ジュラードはこの詩の真のテーマは、茨に具現化されている人間の苦悩であると、象徴的な解釈をしている。一方、W・J・B・オーエンは、語り手の想像力に焦点を合わせ、基本的にはパリスシと同様にこの詩を劇的独白とみている。しかし、彼とはやや角度を変えて、「茨」の詩が語っているのは、

……いじけた茨と小さな泥の池に対する精神の優位性と、茨と池が詩人の想像力によって、人間の悲劇の象徴に変容していることだ。⁽³⁾

とオーエンは考えている。以上のように、この詩はテーマ一つとりあげても、解釈が一致していない。

それでは、このように多様な解釈を生み出してきた「茨」という詩は、どのようなきっかけで書かれたのか。フェンウィック・ノートによると、

ある嵐の日、カントックの丘の上で、晴れた穏やかな日なら、気がつかずに通り過ぎてしまう一本の茨の木を見たことから、この詩は生まれた。「嵐のおかげで、今、茨が私の目に印象深く映っている。それと同じくらい、何か工夫をしてこの茨を印象深いものにするできないだろうか」と私は思った。⁽⁴⁾

のがきっかけであった。このように、「茨」の詩はワーズワスの実際の体験に基づいている。しかも、『抒情民謡集』中で、実際に見た自然の事物にインスピレーションを得て書かれた唯一の詩である。⁽⁵⁾ 茨は、「マイケル」の中のばらばらに積み上げられた石と同様、見えてはいるが、普段は気にもとめずに、通り過ぎてしまうような平凡なものである。このような平凡な事物に、想像力による新奇の光を当てて、平凡な事物を印象深いものにするとは、実は、『抒情民謡集』の目的の一つであった。⁽⁶⁾ 詩人は茨という見慣れた木を、印象深いものにするために何か「工夫」(invention)をしたいと考えた。

その「工夫」について、オーエンはフェンウィック・ノートに書かれていることを信用すれば、

私達はマーサ・レイの物語を、ある意味では、ワーズワスが茨の印象をとどめるための「工夫」と、おそらく考えるだろう。
……ワーズワスの批評用語の中で、「工夫」という語はあいまいである。工夫するもの、と工夫されたものの、意味があるからだ。⁽⁷⁾

と述べている。あるいは、「工夫」はマーサ・レイの物語だけではなく、ジェラードのように語り手を加えることもできる。⁽⁸⁾

いずれにしても、問題は詩人が茨を印象深くする詩を、実際に書けたのかどうかである。パリッシは次のように考えている。

このような（劇的独白とみなすような）詩の読みは、ワーズワスの意図に基づいたものであるが、その読みが提起しそうな問題は、ワーズワスが書こうとした詩が、実際に書いたものと似てゐるかということだ。……もし、一七九八年にワーズワスが書いた詩を詳細に調べれば、この詩は彼が書こうとしたと後で語っているものと、一致しているのがわかると思う。⁽⁹⁾

この後、パリッシは語り手の心理に焦点を合わせ、具体的に詩の検討に入つて行く。そして、この詩全体が語り手の劇的独白になっていることを立証している。

この小論では、ワーズワスの「工夫」の一つである語り手に、パリッシとは違って、特に語り手の技法に注目して、この詩を検討し、茨がはたして印象深いものになり得ているかどうかを明らかにしたい。

(二)

F・シュタンツェルは語り手の義務について、

語り手の人物は、語り手として、自らの物語が聴き手もしくは読み手の共感を呼ぶか、あるいはせめて関心を呼び起こすように、物語を提示すべき義務を負っている。⁽¹⁰⁾

と述べている。「茨」の中の語り手が聴き手あるいは読み手の共感を呼び起こせるなら、茨は彼らにとって印象深くなるはずである。問題はどのようにすれば、彼らの共感あるいは関心を喚起できるか、ということだ。

シュタンツェルは続けて、

そのために、……一定の語りの戦略が必要とされる。つまり、サスペンスの要素を周到に配置するとか、個々の作中人物に対する読者の共感と批判を操作するとかいったことをしなければならないのである。これらの事柄は、語り手の評釈的なコメントとか、あるいは無意識裡に作用を及ぼすレトリックによってなしうる……⁽¹¹⁾

と説明している。そうすると、「茨」の中で「語りの戦略」がどのように使われているかを調べれば、聴き手や読み手の共感が得られているかどうかがある程度判断できる。そして、最終的に詩人が茨を印象的なものになし得ているか否かが明らかになろう。

「茨」の詩を三つに分け、語りの戦略、語り手の技法に焦点を当てながら詩を読んで行こう。最初は第一連から五連まで。この箇所はマーサ・レイの物語の背景となる風景の説明である。まずは茨の描写から始まり、池、美しい苔の塚へと移る。この三つの物と後述されるマーサ・レイの物語との関連性が、語り手によって周到に作り上げられて行く。語り手はこの五つの連で語った事柄と、それ以降の連で「これから語られる事柄との間に、必然的に相互参照の網の目」⁽¹²⁾を張りめぐらしている。

例えば、茨と苔は語り手には次のように映る。

苔は大地からはい上がり、

哀れな茨にびったりと抱きつき

茨を大地に

引きずり下ろしてやろうと

はつきりと決めているようだ。

苔は一丸となって、この哀れな茨を

永久に葬ろうと努めているのだ。⁽¹³⁾

(二六—二二)

茨と苔の関係は、これから語られるマ―サと村人の関係に似てはいまいか。また、茨や池だけでなく、塚の大きさも示されていて、これらとマ―サの幼な児との関連性が作り上げられている。このような方法は、やがて語られる物語りへ近づくと「ゆっくりと遠回りではあるが……非常に効果的」な方法である。⁽¹⁴⁾

老いて灰色の茨と新鮮で色彩豊かな苔の塚とのコントラストも見られる。美しい苔の塚は、大きさが幼児の墓ほどだと語られ、聴き手はこの連想に一瞬意外さを感じるかもしれない。

茨の老いた状態も強調されている。「老いた、古びた」(“old”, “aged”)、「灰色の」(“gray”)などの語が繰り返されている。また、「惨めな」(“wretched”)、「哀れな」(“poor”)という形容詞でも修飾されている。しかし、またまっすぐに立っている様子も、“erect”という語が繰り返されることで強調されている。

以上のように、冒頭の五連では語り手の技法―関連づけ、コントラスト、反復―により、聴き手は何が起こるかまだわからないにせよ、茨や池、塚には何かがありそうだという予感にはたに違いない。J・A・ヘファナンは、ここ

で特に私達の注目を引くのは、

頑固にまっすぐ立ってはいるが、「惨めでわびしい」茨を取り巻く、哀愁にみちた荒涼とした場所の雰囲気だ。茨と捨てられた母との関係を知る前でも、この茨は即座に感情に訴えかける。詩人が茨をそれとなく人間に似たものにしてゐるからだ。⁽¹⁵⁾

と述べている。

第六連から十連までは、マーサ・レイの物語への直接の導入部である。茨や池、苔の塚を見たければ、時を選べと言つて語り手は聴き手の関心を引きつける。理由は女がそこに出没するからだ。「ああ、かわいそう！ああ、かわいそう！」（六五行）、「ああ、悲しい！ああ、悲しい！」（六六行）と泣いてゐるからだと言う。この理由を聞いて、聴き手はその場所がわけありなのを確信する。しかし、女が昼夜を問わず、風の日も寒い日も、なぜ山へ登つて泣くのか聴き手にはまだわからない。ここで初めて聴き手は質問する。八連全体が質問になつてゐる。語り手の話に興味をもち始めた証拠である。

ここからの語り手と聴き手のやりとりが興味深い。聴き手の矢継ぎ早の質問に対して、語り手の答えは、

理由はわからない。私も知りたい。

本当の理由は誰にもわからない。

と二行ですませ、いたってそっけない。しかし語り手は、すかさず、その場所を見なければ女のいない時に行け、と忠告し聴き手の関心をつなぎとめようとする。

女がそこにいる時に、大胆にも

その場所に行った人はいないそうだ。

(九八―九九)

これで聴き手の好奇心は再び喚起される。

聴き手は二度目の質問をする。しかし今度は、「知っていることは全て話そう」(一〇五行)と、語り手は答える。そう言いながらも語り手は、「おそろくその場所へ行けば、少しは女の身の上がわかるう」(一〇九十行)などと言つて、なかなか本題に入ろうとしない。早く真相を知りたい聴き手の心理を巧妙に操作し、サスペンスを持たせている。

茨とマーサの関連性、もしくは類似性がここでも指摘できる。第七連から八連にかけて、マーサが嵐の日でも山に登っている様子が語られているが、これは第三連の嵐が吹き荒れる山頂の茨の描写と重ね合わせることができる。このことを暗示するかのように、茨とマーサは並置されている。

茨のそばに女は座る。

(七二)

なぜ女は茨のそばに座るの。

(八二)

いよいよ第十一連からマーサ・レイの物語が始まる。二十数年前の話である。マーサという娘がスティーヴン・ヒルという若者と恋仲になったが、捨てられた。それ以来マーサは山に登るようになり、その時にはすでに子供を宿していたことが、村のうわさ話として語られる。その後、語り手はマーサの子供のことはこれ以上わからないと言って、知らないことを強調して話を終えようとする。

このかわいそうな子がどうなったのか、

知っている人はいない。

子供が生まれたのかどうか、

知る人は誰もいない。

生きて生まれたか、死んで生まれたか

知っている人はいない。

(一五七—六二)

しかし、語り手はすぐ「しかし、このころマーサ・レイが度々山に登ったのを覚えている人がいる」(一六三—六五行)と言って、話を続ける。これは、わからないと言っておきながら話を続行する、語り手の常套手段である。この後、語り手は聴き手の短い質問をはさみながらも、一気に語り終える。

その際、語り手は自分の伝える出来事の真実の程度を慎重に区別して語っている。ジェラードは次のように、三つに区別している。

彼（語り手）が個人的に知っている唯一の事実は第十七連に見つけ出すことができる。また、うわさで知っている出来事もたくさんあるが、これらも同様に真実として提示されている。例えば、第十一連と十二連のマーサ・レイの悲劇に関する出来事である。また、村人から彼女を守ろうとする自然の介入も同様である。その他の出来事は、全てゴシップで推測として提示されている。語り手は村人の無知を主張し、自らも「村人」という集合体の中に身をかくしている⁽¹⁶⁾。

このような区別から、マーサに対する語り手の態度を推測することができよう。自然の介入のエピソード（二二連）は、「……と言う人もいる」（“Some say”）、「……というごときだ」（“They say”）、「……と言われている」（“‘Tis said”）という前置きなしに語られている。このことは、ジェラードの指摘のように、真実として語り手は提示していると考えることができる。いずれにしても、語り手のマーサへの同情を示すものと推測できる。

この他にも、うわさを否定しようとする語り手の次のようなコメントにもそれは表れている。

それらは死者の声だったと、

多くの人が断言するのを聞いたことがある。

彼らが何と言おうと、私には思えない、

その声がマーサ・レイに関係があるとは。

苔が赤いのは、哀れな子供の

血のせいだと聞いた。

しかし、生まれたばかりの子供を

殺すなんて、彼女にできるとは思わない。

(二二二—二四)

また、語り手のステイーヴンに対するのろいの言葉にも、マーサへの同情の念が表現されている。

ああ！一万回でも死んだらいいのに、

あの残酷な父親が！

(一四二—四三)

第二〇連の聴き手の最後の質問は、短いが内容の点からだけでなく、詩の構造上からも重要である。

だけど、茨は何なの、池は何なの、

苔の塚は、女にとって何なの。

(二一〇—一一)

この質問は、聴き手の心の中に茨、池、塚の印象が深く刻み込まれていることを示唆している。語り手による、これら三つの物とマーサとの周到な関連づけの結果かも知れない。この質問がきっかけで、語り手はマーサの子供と茨、池、塚との関係をうわさとして伝え真相はわからないまま、聴き手を再び冒頭の茨の風景へスムーズに導き、物語を終えることができたからだ。ここにこの詩の循環性を認めることができる。